史記列伝

小川環樹
今鷹　真訳
福島吉彦

世界古典文学全集

20

筑摩書房

史記列伝　　世界古典文学全集　第20巻

昭和44年 9 月15日第 1 刷発行
昭和57年12月25日第 2 刷発行

訳者代表　小川環樹

発行者　布川角左衛門

発行所　株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2 ― 8
郵便番号101―91　振替東京6―4123
電話　東京　291―7651（営業）
294―6711（編集）

0398-20320-4604　　三晃印刷／矢島製本

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

史記列伝

目次

小川環樹
今鷹　真　訳
福島吉彦

伯夷列伝第一　5
管・晏列伝第二　8
老子・韓非列伝第三　11
司馬穰苴列伝第四　17
孫子・呉起列伝第五　19
伍子胥列伝第六　24
仲尼弟子列伝第七　31
商君列伝第八　42
蘇秦列伝第九　48
張儀列伝第十　64
樗里子・甘茂列伝第十一　77
穰侯列伝第十二　84
白起・王翦列伝第十三　88
孟子・荀卿列伝第十四　93
孟嘗君列伝第十五　98
平原君・虞卿列伝第十六　106
魏公子列伝第十七　113
春申君列伝第十八　118
范雎・蔡沢列伝第十九　124
楽毅列伝第二十　138
廉頗・藺相如列伝第二十一　143
田単列伝第二十二　150
魯仲連・鄒陽列伝第二十三　153
屈原・賈生列伝第二十四　162
呂不韋列伝第二十五　170
刺客列伝第二十六　175
李斯列伝第二十七　187
蒙恬列伝第二十八　203
張耳・陳余列伝第二十九　207
魏豹・彭越列伝第三十　216
黥布列伝第三十一　220
淮陰侯列伝三十二　226
韓信・盧綰列伝第三十三　240
田儋列伝第三十四　245
樊・酈・滕・灌列伝第三十五　249
張丞相列伝第三十六　259
酈生・陸賈列伝第三十七　264
傅・靳・蒯成列伝第三十八　272
劉敬・叔孫通列伝第三十九　275
季布・欒布列伝第四十　282
袁盎・鼂錯列伝第四十一　286
張釈之・馮唐列伝第四十二　295
万石・張叔列伝第四十三　300

田叔列伝第四十四 499
扁鵲倉公列伝第四十五（省略） 494
呉王濞列伝第四十六 491
魏其・武安侯列伝第四十七 484
韓長孺列伝第四十八 473
李将軍列伝第四十九 457
匈奴列伝第五十 447
衛将軍・驃騎列伝第五十一 439
平津侯・主父列伝第五十二 436
南越列伝第五十三 419
東越列伝第五十四 391
朝鮮列伝第五十五 388
西南夷列伝第五十六 385
司馬相如列伝第五十七 382
淮南・衡山列伝第五十八 377
循吏列伝第五十九 369
汲・鄭列伝第六十 356
儒林列伝第六十一 340
酷吏列伝第六十二 333
大宛列伝第六十三 328
游侠列伝第六十四 320
佞幸列伝第六十五 310
滑稽列伝第六十六 307
日者列伝第六十七
亀策列伝第六十八（省略）
貨殖列伝第六十九 515
大史公自序第七十 503

解説 525

六国年表　司馬遷年譜　地図　索引

小川環樹

訳者分担

列伝第一―二十四、六十七―七十、六国年表　小川環樹訳
第二十九―三十六、四十六―五十六、六十三　今鷹　真訳
第二十五―二十八、三十七―四十四、五十七―六十二　福島吉彦訳
六十四―六十六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

史記列伝

伯夷列伝 第一[1]

末の世のひとびとはわれ勝ちに利益を争うなかで、ただこの二人のみが正義へ向かってふりかえらず、国を〔弟に〕ゆずり、餓え死にした。天下のひとは、これをほめたたえる。だから伯夷列伝を作る――太史公自序

およそ学問するひとが用いる書籍はじつに範囲がひろい。それでも信頼度をたしかめるにはやはり六経[2]をたよりにする。詩経と書経には篇のかけたところがある[3]けれど、虞（舜）や夏（禹王）の時代のかがやかしいあとを知ることはできる。〔たとえば〕堯は位をしりぞこうとおもい、舜にあとをゆずった。舜から禹王へのあいだでは四岳十二牧[4]の大臣たちことごとく禹をすすめた。そこでまずその地位において試みられ、禹は職をつかさどること数十年、いさおしのしるしがたかくあらわれた。しかるのちに政事はかれにひきわたされたのであった。天下とはいかに重き器であるか、王者はいかに大いなるすじめであるかを明示したのであって、天かくのごとく、下を伝えることは、容易なことではなかったのである。ところが説をなす者はいう、「堯は天下を許由に譲った。許由は受けず、そのことを恥として逃げだし身を隠した[5]」と。夏の世になってからも卞随や務光というものが有ったともいう。どうしてこんな人たちの名が口にされるのであろうか。

太史公いわく[6]、わたしは箕山に登った。山上には許由の塚があるということであった。孔子はいにしえの仁者・聖人・賢人のことを述べたたえた。たとえば呉の太伯とか伯夷などのひとびとにつき詳しく言ってある。わたしの伝聞するところでは、許由や務光の節義はじつに高いのに、かれらについての文辞がいささかも概略さえ〔経書中に〕あらわれていないのは、何ゆえであるか。孔子は言った、「伯夷・叔斉は旧き悪みを念わず。怨みは是を用って希なり[7]。」また「仁を求めて仁を得たり。また何をか怨まん[8]」と。わたしは伯夷の決意に感動を覚える。だが逸詩を

---

(1) 伯夷が列伝の最初に置かれたのは、かれが時代から言っても最も古い人物であるのみならず、列伝全部の序論ともいうべき意味をもっているためである。唐代に老子を帝室の祖先として尊んだため、老子〔および荘子〕を列伝の最初とし伯夷の前に置いた。いわゆる正義本がこれである。これより二類のテクストが生じたが、いま原形に近いと考えられる集解本の順序に従う。

(2) 原文「六芸」。ここでは儒家の経書をひっくるめていう。易・書・詩・礼・楽・春秋の六つ。このうち楽だけは、もと経があったが早く亡んだといわれた。

(3) 「詩経」はいまの本で三百五篇、ほかに数篇が亡びたという。「書経」はもと百篇といい、漢代では二十八篇のみが読まれた。どちらも伝承により篇のかぞえかたに異説がある。

(4) 原文「岳牧」。岳は四岳、牧は十二牧で合計十六人。

(5) 許由のことは、次の卞随・務光とともに「荘子」譲王篇に見える。説をなす者（原文は説者）とは異説をいう。この一説は著者司馬遷が歴史の最も信頼すべき事実を伝えるものは儒家の経伝であると考え、その他の学派の説に対する不信の態度をとることを示す。

(6) 太史公の称については、最後の篇「太史公自序」参照。ここは明らかに司馬遷の自称である。

(7) 「論語」公冶長篇の引用。怨みとは他人の怨恨をいう（宋の邢昺の論語疏の説）。ひとから怨まれることが少ないというのである。ただし梁の皇侃の「論語義疏」では「人において怨み少し」と解する。司馬遷もそう解したと思われる。

(8) 「論語」述而篇より引用。これは子貢の問いに孔子が答えたことばで、通常は伯夷叔斉が国を譲ったことについて怨みをもたなかったと解されている。しかし司馬遷の意はあるいは周の武王が諫めをきかなかったのを怨まなかったと解すべきかも知れぬ（哀公四年公羊伝の疏）。

みると、うたがいなきをえない。[1]

伝えによると、伯夷と叔斉は孤竹君の二子である。父は叔斉をあとつぎにしたく思っていた。父がなくなるや、叔斉は伯夷に譲ったが、伯夷は「父上のいいつけだ」と言い、かくて逃亡した。叔斉もやはり君となろうとはせずに逃げた。孤竹国の人々は二人のまんなかの子を君とした。そのとき伯夷と叔斉は西伯昌（周の文王）が老人をいたわると聞いて、そのもとへ向っておちついたということである。

西伯がなくなるにおよび、武王は〔父の〕木主を車に安置し――父を文王とよぶことにして――東へ向って殷の紂王を征伐に出た。伯夷と叔斉はその馬の手綱にとりついて、いさめた、「なくなられた父ぎみを葬りもせず、しかも干戈をおこすとは、孝といえましょうか。臣として君を弑せんとすること、仁といえましょうか。」側のものがやいばをむけようとした。太公（呂尚）は「これぞ義人である」と言い、おしかかえてつれてゆかせた。武王は殷の乱れを平定しおえて、天下は周を主人とした。ところが伯夷と叔斉はそれを恥とし、義をまもって周の穀物を食べることをいさぎよしとせず。首陽山に隠れ住み、薇を採って食べていた。

餓えて死がせまったとき歌を作った。その辞にいう、「彼の西山に登り、その薇を采りぬ。暴を以って暴に易え、その非を知らず。神農・虞・夏も、忽焉として没せり、我安にか適きて帰せん。于嗟徂かん、命の衰えたるかな。」かくて首陽山において餓え死にした。このことから考えるに、怨みがあったのでもあろうが、そうではないのか。

「『天道には親無し。常に善人に与す』という。伯夷と叔斉のごときは、善人といってよいのだが、そうではないのか」と言うひともある。仁を積み行ないをいさぎよくしたことかくのごとくであっても餓死した。そればかりか〔孔子の門人〕七十子のともがらのうちで、仲尼（孔子）は、ただひとり顔淵を学をこのむとして推賞した。しかるに「回也（顔淵の名）しばしば空し」といわれたように、酒の糟や糠にも食べあきることさえできず、とうとう夭折した。天が善人に対する報いとは、いったいどんなことなのか。

盗跖は毎日罪のないものを殺し、人の肉を生で食い、兇悪でわがままであり、数千人の徒党をくみ、天下を横行したが、寿命をまっとうして死んだ。それは何の徳をおこなったのであったか。これらは、とりわけいちじるしく目につく例である。

近き世となっては、操行はみちにはずれ、忌みはばかるべき事をかえりみないのをもっぱらとして、しかも終生たのしみにふけり、富みさかえ、代々子孫もたえないものがある一方で、地をえらんで踏み、時機を考えてのちに発言し、行ないは径をとおらず、正しきことにのみ憤りを発する、それでわざわいに出会った者の数は、とてもかぞえきれない。わたしははなはだ当惑する。もしかすると天道といわれるものがただしいのか、ただしくないのか。

孔子は言った、「道同じからざれば、相為に謀ることをせず」と。ひとおのおのの志にしたがうのである。ゆえに「富貴にして如し求む可くんば、執鞭の士といえども、吾亦これを為さん。如し求むべからずんば、吾が好む所に従わん」といい、「歳寒うして、然る後に松柏の凋むに後るるを知る」とも言う。世のなかすべて混濁し、はじめて清廉の士があらわとなる、というが、〔富貴なる者は、〕あのように重んぜられ、〔富貴でないものは〕これほども軽んぜられる、それでよいものだろうか。「君子は世を没えても名の称せられざることを疾む」といい、賈子は言った、「貪夫は財に徇じ、烈士は名に徇ず。夸る者は権（権力）に死し、衆庶（凡人）は生をむさぼる」と。「明を同じゅうすれば相照し、類を同じゅうすれば相求む。雲は竜に従い、風は虎に従う。聖人作って万物覩わる」という。

伯夷と叔斉は賢者であったけれども、夫子（孔子）のおかげでその名はいっそう彰われた。顔淵は篤学のひとであったけれども、蠅が名馬のしっぽにくっついたごとく、行ないがいっそう顕わとなった。岩屋にかくれすむ士が、世に出るか出ないかは時運によって異なる。このたぐいのひとで名はうずもれはてて引きあいにも出ないのがある。悲しいこと

ではある。村里の人は、行ないにはげみ名を立てんと欲しても、青雲の高き人[11]にとりすがらないかぎり、後世までつたえられることが、どうしてあり得ようか。

---

(1) 逸詩は「詩経」に収録されていない詩篇をいう。ここは下文に見える「歌」をさすと解せられる。この句は、孔子の言うように伯夷が怨みをいだかなかったとは考えられないの意。

(2) 「伝」は何という書のことか不明。漢代までは伝という名の包括する範囲は広く、今日いう伝記だけをさすのではない。孤竹は国名。

(3) 「老子」七十九章のことば。「親無し」とは、ここではえこひいきしない意。

(4) 「論語」先進篇の孔子のことば。空は欠乏、衣食にもことかくほど貧乏なこと。

(5) 盗跖とも書く。有名な盗賊のかしら。「荘子」その他に名が見える。

(6) 以下の孔子の言は「論語」衛霊公・述而・子罕の各篇に見える。執鞭の士はごくいやしい下男の仕事。松と柏は常緑樹、凋は落葉のこと。「あいために謀ることをせず（不相為謀）」とは信ずるところを異にするものには協力しない意である。

(7) 老子にこれと似たことばがある。「国家昏乱して忠臣有り」（十八章）。

(8) 「論語」衛霊公篇よりの引用。疾むとは、最大の苦痛とする義。死後になっても名声がないのは、その人が何も善行をしなかった証拠である（朱子の注に引く范氏の説）。

(9) 賈子、漢の賈誼。「屈原賈生列伝」参照。徇はある物事のために一身をささげること。

(10) 「易経」（周易）文言篇よりの引用。風と雲は同類相求の例。覩は熟視の義。ここでは顕著となる意。

(11) ここでは世俗的な高位の人をいうのでなく、精神的に高貴な人、聖人――孔子――をいう。

管・晏列伝 第二

晏子は倹約をむねとした。夷吾（管仲）は豪奢であった。斉の桓公は〔管仲のはたらきで〕霸者となったし、景公は〔晏子のたすけで〕国が治まった。だから管晏列伝を作る――太史公自序

管仲[2]・夷吾[1]というのは、潁上（潁水の岸）の人である。若いころ鮑叔牙[2]と友だちになった。鮑叔はかれが賢者であると知っていた。管仲は貧困で、いつも鮑叔をだましたが、鮑叔はつねに善意でかれに対し、何も言わなかった。そのうちに鮑叔は斉の公子小白[3]につかえ、管仲は公子糾につかえるようになった。小白が位につき桓公となったときには、公子糾は死んで管仲は入獄していた。かくて鮑叔は管仲を〔桓公に〕推薦した。管仲は任用ののち、斉の政治をゆだねられた。斉の桓公が霸者となって、諸侯を九合し、天下を一匡したのは、管仲の立案によるのである。

管仲のことばに「わたしがもと貧困であった時、鮑叔といっしょに商売したことがある。そのもうけを分配するのに、自分の取り分を多くしたが、鮑叔はわたしのことを貪欲だとは言わなかった。わたしが貧しいと知っていたからだ。わたしは鮑叔のためにある計画をたて、結果はいっそう困窮になったことがあるが、鮑叔はわたしを愚かだとは言わなかった。時の利・不利があると知っていたからだ。わたしは三人の主君に仕えて三度とも追い出された。鮑叔はわたしが賢明でないとは言わなかった。わたしが不運だったと知っていたからだ。わたしは三度のいくさで三度とも逃げたことがある。鮑叔はわたしを臆病者とは言わなかった。わたしに老いた母がいることを知っていたからだ。公子糾のやぶれたもうたとき、召忽は殉死した。わたしは牢に入れられ辱しめを受けたが、鮑叔はわたしを恥を知らぬ男だと言わなかった。わたしが小さな節義に羞かしがらず、功名が天下にあらわれないことを恥としていると知っていたからだ。わたしは父母から生をうけたが、わたしをまことに知っているのは鮑子である」という。

鮑叔は管仲を主君にすすめたあとは、自身はその下位にあった。かれの子孫[4]代々斉の禄をはんで、領地をたもつこと十代あまり、つねに名ある大夫であった。天下の人々は管仲の賢明をたたえるよりも、鮑叔がよく人を知る明があったことをたたえる。

管仲が政治をゆだねられて斉の宰相となったのち、斉はちっぽけな国で海べにあるため、貿易をひろめ財産をつみ、国を富ませ兵を強くし、大衆と欲望を同じくした。[5]ゆえに、その〔書物に〕のべる所によれば、「倉廩（倉庫）実ちて礼節を知り、衣食足って栄辱を知る。上の服に度あれば六親は固く、四維張らざれば、国は乃ち滅亡す。令を下すには流水の原あるが如くし、民心に順わしむ」とある。[6][7]ゆえにかれの理論は卑近でおこなわれやすかった。大衆の欲するものごとは、そのとおりに与え、欲しないものごとは、そのとおりに除いた。かれの政治のやりかたは、禍をそのまま福にし、失敗を転じて成功を得るのにすぐれていた。[8]なにごとにも軽重を貴び、権衡に慎しんだのである。[9]

桓公が〔蔡国から来た夫人〕少姫のことで腹を立てたのは事実であって、南征し蔡を襲撃した。管仲はそれをしおに楚を伐ち、〔周の祭祀に用いる〕包茅の貢物を周室におさめないと非難した。桓公が山戎族を北征したのは事実であったが、管仲はそのしおに燕の召公のころのしきたりをまた行なわせた。[10]柯において〔魯と〕会盟のさい、曹沫とつがえた約束を桓公は破ろうとしたが、[11]管仲はそのまま信義をまもらせた。諸侯はそれがもとで斉に帰服した。ゆえに「之に与うるの取るとなるを知るは、政の宝なり」[12]というのである。

管仲の富みは主君のそれに匹敵し、三帰と反坫[13]さえあったが、斉の国民は奢侈にすぎるとはみとめなかった。管仲がなくなってからも、斉の国はかれの政治のやりかたをよく守って、いつもほかの諸侯より強大で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あった。のち百年あまりして晏子が出たのであった。

晏平仲・嬰は、莢の夷維の人である。斉の霊公・荘公・景公につかえ、節倹力行をもって重んぜられていた。斉の宰相となったあとも、食事に肉は二皿つかわず、下女には帛をきせなかった。かれは朝廷にあっては、主君にことばをかけられれば、まっすぐに言い、ことばをかけられなければ、自分のおこないをまっすぐにしていた。国の政が道理にかなっていれば、ただちに君命にしたがい、道理にかなわなければ、君命を衡量していた。このことによって三代〔の主君に仕えた〕諸侯のあいだに名声があらわれていた。

越石父は賢者であったが、囚人としてつながれていた。晏子は旅行の

---

(1) 夷吾が名で、仲は字（あざな）。ふつう管仲とよばれる。

(2) おそらく牙が名、叔は字である。以下みなただ鮑叔とよぶのは、字を用いたこと管仲と同じであろう。「だました」とは、二人が共同して商売したとき、管仲が鮑叔の目をごまかして利益を自分のふところにたくさん入れた話（『呂氏春秋』）によると思われる。下文に見える。

(3) 九合は諸侯を会盟せしめた回数が多かったこと。九は極数である。一匡の匡は正すこと。天下が乱れていたのを正し秩序だてた意。この二句は「論語」憲問篇に見える。朱熹の注では、九合は糾合に同じで、「ただし合わす」とよみ、諸侯をひきい集めた義という。

(4) これは鮑叔牙の子孫をいう（清の洪亮吉の説）。

(5) 原文「与俗同好悪」。人民の欲するところに従った政治をした意。功利主義 Utilitarianism に似ている。管子の学説は、儒家に影響を与えた（ただし今の「管子」の書は戦国時代に作られたであろう）。けれども根本の理念は異なり、孟子などとは大いにちがう。通常は「法家」に属するとされ、A. Waley は「韓非子」と共に Realists に数えた。

(6) 服は行ない。度は節度。六親は父母兄弟妻子それぞれの親族をひっくるめていう。

(7) 四維は礼・義・廉・恥の四つ。維は大綱。この一節は「管子」牧民篇よりの引用。

(8) 「管子」に軽重篇があって物価調節の政策を説く。この軽重はその政策をさす（索隠の説）。しかし「権衡につつしむ」とは、もっと一般的なことで、事物の均衡を慎重に考えることだから、上の句もその一端にすぎぬ（滝川氏の解による）。

(9) 夫人は船に乗りなれていて、桓公と二人で乗っていた船をぐらぐらさせ、桓公がこわがるのを面白がった。桓公は怒って夫人を蔡にかえし、両国不和となり、戦いがおこった（「左伝」僖公三年、および「斉の世家」）。

(10) 召公は燕の始祖で、周とは同姓の国である。桓公が覇者たりしときの燕の君は荘公。桓公は燕が山戎族の侵入になやんだのを助けて北征したが、それ以後、燕の周の王室に対する態度を改めて忠実に仕えること、昔の召公の世のごとくしたというのである。事は「斉」および「燕の世家」にも見えるが「春秋」およびその三伝のつたえに合しない。おそらく斉の国にこの伝説があって、司馬遷はそれを用いたのであろう。

(11) 柯の会合において魯の将曹沫は匕首をつきつけ桓公をおびやかして、斉が魯から奪った土地をかえさせた。桓公は後で悔み違約したく思ったが、管仲はいさめて約束を守らせた。（事は斉と魯の世家に見え、公羊伝荘公十三年に基づく。）

(12) やはり「管子」牧民篇よりの引用。

(13) 三帰は、邸が三個所あったこと（清の兪樾の説）。坫は、広間の柱と柱の中間にあって、公式に酒をくみかわす際、献酬が終るとその爵を反しておく場所。これを作ることは諸侯にのみ許され、管仲は大夫であるから、論語では僭上のふるまいとして非難している（八佾篇）。

(14) 平仲は字、嬰が名。

(15) 原文「危言」「危行」。論語に「邦に道あれば、危言危行す」（憲問篇）とあり、朱子の注では「危は高峻なり」と言う。古注は「厲なり」とあるから、きびしい義。王念孫は「広雅」により、「正なり」とした。ここでは厲と正の二つの訓を参取して訳した。

(16) 原文「衡命」。衡ははかりにかけること。慎重に熟慮し、おこなうべきことをおこなった意。

途中、かれに出会い、車の左のそえ馬をはずし、身の代として、かれを自由の身にした。車に同乗して帰ったが、何も言わず、奥へはいってしまった。しばらくして越石父は立ちのくと申し出た。晏子は目をまるくしたが、身づくろいしてわびた。「それがしは人情に欠けておるのかも知れぬが、貴公を難儀より救い出した。絶交したいと言われるのはあまりにも早すぎるではないか。」石父「いや、そうではありません。『君子は己を知らざる者には屈し、己を知る者に志を伸ぶ』と聞きます。わたしがつながれておりましたときには、つないだものは、わたしを知らなかったのでした。あなたさまがお心に感ずる所あって、わたしを自由にして下さった上は、『己を知る者』であられます。『己を知り』ながら礼が無くては、つながれていたほうがましであります。」晏子は、そのとき、かれを迎え入れて上客とした。

晏子が斉の宰相となっていたとき、外出のおり、かれの御者の妻は、門のすきまから夫のようすをのぞいていると、夫は宰相の御者だから、車の大きなほろの側に立ち、四頭の馬にむちをあて、意気揚々、はなはだ得意げだった。あとで帰ってくると、妻は離婚を申し出た。なぜかと夫が問うと、妻は言った、「晏子さまは身のたけ六尺[1]にたりないけれど、斉の国の宰相で、諸侯に名を知られたかたです。今日、わたしはお出かけを見ていましたが、深いお考えがあるのでしょう、へりくだっていらっしゃいました。おまえさんは高さ八尺もありながら、ひとの下男をしています。それでも、おまえさんは満足しているのでしょう。わたしは、だから、出てゆきたいというんです。」それからは夫は態度を自制していた。晏子がふしぎがって問うたところ、御者はありのままを答えた。晏子はかれを推薦し大夫とした。

太史公いわく、わたしは管子の牧民・山高・乗馬・軽重・九府の諸篇、および「晏子春秋」を読んだ。いかにもその言いかたは詳しいものだ。かれらの著書をみた以上は、そのおこないをしらべてみたく思った。だから伝をここにおく。その書物のほうは、世上に多くある。それゆえ論じない。逸事だけを書きつらねる。管仲は世にいう賢臣である。しかし孔子は〔その器は〕小さいと言った〔論語・八佾篇〕。周の道が衰微したとき、桓公が賢主であったからには、かれをはげまして王道をおこなわせることをしないで、覇者と称せしめた〔のに不満であった〕ためであろうか。語にいう、「其の美を将い順い、其の悪を匡し救う。故に上下よく相い親しむ[2]」とは、管仲にちょうどあたることばでもあろうか。

晏子は荘公の〔殺されたとき、その〕死骸に身を投げかけ、声をあげて泣き、礼儀をうしなわなかった。そのうえでその場を立ち去った。これぞ「義を見て為さざるは勇無きなり[3]」というものであろうか。いさめるときには主君の顔色をかえりみなかった。これぞ「進んでは忠を尽くさんことを思い、退いては過ちを補わんことを思う[4]」というものであろうか。かりにもし晏子その人が世にあったら、わたしはその鞭をとる身となっても、あおぎ慕うところである。[5]

老子・韓非列伝 第三[6]

李耳は〔君主が〕無為であれば〔民は〕おのずから化せられ、清潔平静であれば〔民は〕おのずから正しくなると考えた。韓非は事のなりゆきを予見し、勢いと道理にしたがうことを説いた。老子韓非列伝を作る――太史公自序

老子というのは、楚の苦県厲郷曲仁里の人である。名は耳、字は聃、姓は李氏。周の蔵室[8]を管理した史官であった。

孔子は周の都へおもむき、礼について老子に質問せんとした。老子は言った、「きみが言っている人たちは、その骨といっしょに朽ちてしまった。ただそのことばだけが存在する。それに君子は時を得ればそれに乗り、時を得なければ、転蓬[9]のごとくさすらう。『良れた商人は品物を深くしまいこみ何もないように見え、君子は盛んな徳があっても、容貌は愚者に似る[10]』とわたしは聞いた。きみの高慢と欲望、ようすぶることと多すぎる志をのぞくことだ。そんなことはどれもきみの身にとっては無益だ。わたしがきみに教えられることは、それくらいのものだ。」孔子はそこを立ち去って弟子たちに言った、「鳥ならば飛ぶ能があり、魚ならばおよぐ能があり、獣ならば走る能があると、わたしは知っている。走る者は網でとり、およぐ者は綸でとり、飛ぶ者は矰でとることができるはずだ。竜という奴になると、わたしにはわからない。風雲に乗じて天にのぼるかも知れぬ。わたしはきょう老子にあったが、まあ竜のごときものでもあろうか。」

---

(1) 漢代の一尺は約二三センチメートル。周代でも大差ないとすると、六尺は一四〇センチ弱になる。

(2) 「孝経」事君章（第十七）より引用。この二句の訳は魏の王肅の注（唐の玄宗皇帝の御注も同じ）による。

(3) 「論語」為政篇よりの引用。反逆者の面前でしたのは勇気がなくてはできないとほめたのである。

(4) 「孝経」事君章よりの引用。

(5) 晏子の御者の話は、滑稽な感じを読者に与えるだろう。しかし司馬遷がこの逸話を特に取りあげた理由は、かれが刑罰をうけたとき、誰の援助もなかったみじめさを想起したからであろう。前の越石父の場合は、司馬遷がかれをうらやむのは当然であった。二つの逸話は、著者自身の非運との対比のため載せられたとしてよい。

(6) 伯夷列伝の注（五ページ）参照。「申不害韓非列伝」と題するテクスト（正義本）があるのは唐代にこの一篇から老子・荘子をぬき取って伯夷の前におき、列伝の第一にした結果である。また別に「老荘申韓列伝」と題する本があるが、たぶん宋末または明代に改められたと考えられるから、伯夷伝と同じく比較的ふるいテクスト（集解本）に従う。

(7) この老子伝は特にテクストの乱れが多い。他の列伝と同様、ここでも主として滝川氏の考証によって二、三個所を校訂したほかは、なるべく改めないこととした。詳しいことは武内義雄氏の「老子の研究」（昭和二年、改造社刊、および十四年、改造文庫）と「老子原始」（昭和四十二年、弘文堂）を参照。

(8) 原文「周守蔵室之史也」。蔵室は蔵書室すなわち周の宮廷図書室のこと（索隠の説）。史は史官すなわち記録係。守という字からみると、その係長であったらしい。

(9) 原文「蓬累而行」。蓬累二字の意義は未詳。しばらく正義により転蓬の義として解する。蓬は北方の原野に生ずる植物で、秋になると根ごと抜け風のまにまに吹き飛ばされてゆく。日本のよもぎとは別種。

(10) 原文「良賈深蔵若虚……」これとほとんど同じ文は「大戴礼」曾子制言篇上に見える。

(11) 矰は音ソウ。ひものついた短い矢。鳥をとる道具。そのひもを繳といい、それを使うひとを弋者という。

老子は道と徳をたいせつにした。その学説はおのれを隠し無名でいることを要務とする。周の都に長らくいたが、周の国力が衰えたと見、やがて立ち去って関まで来た。関令尹喜が言った、「あなたはこれから隠者になられるのでしょう。わたしのために無理とは思いますが書物をかいてください。」そのとき老子ははじめて上下二篇の書をあらわし、道と徳の意義をのべること五千余言。そして立ち去り、どこで死んだかを知るものはない。

ある説では、老萊子もおなじく楚の人であって、十五篇の著書があり、道家の理論の応用を説き、孔子と同じころであった、ともいう。老子は百六十歳あまりまで生き、二百余歳だったともいうが、道の修行をつんで寿命をのばしたのだということだ。孔子の死後百二十九年たったとき、歴史には、周の太史儋は秦の献公に面会し、「当初は秦と周は合体していた。それが五百年して離れる、離れて七十年で覇王となる者が出るのである」と言ったとしるされる。この儋がすなわち老子だといい、そうではないともいう。世にそのどちらが正しいかを知るものはない。

老子は隠君子であった。老子の子の名は宗。宗は〔戦国の〕魏の大将で段干の地に封ぜられた。宗の子は注。注の子は宮、宮の玄孫は假。假は漢の孝文帝に仕え、假の子解は膠西王卬の太傅（もり役）となり、それで斉に住むようになったのである。世に老子の説をまなぶひとびとは、儒学を排斥し、儒家の学者も老子を排斥する。『道同じからざれば、たがいに謀ることをなさず』とは、ちょうどそれをさすではないか。

荘子というのは、蒙の人である。名は周。かつて蒙で漆園管理の役人であった。梁の恵王や斉の宣王と同じころである。

かれの学問はひろく、あらゆる学派の説に通じていた。けれども根本的な点では老子の説いたところにおちつく。かれの著書は十余万言、おおむねは架空の人のことばである。漁父・盗跖・胠篋などの篇を作って、孔子の弟子をそしり、老子の思想を明らかにした。畏累虚や亢桑子などの類も、空想の対話であって事実ではない。けれども文辞をつづり、比喩をつかうのにたくみであって、それによって儒家や墨家の力をそいだ。そのころの知識に富んだ学者でも、切りかえしはしても守りおおせることができなかったし、かれのことばはどこまでのびるか知れぬほどで、自由自在であった。だから王・公・大人たちも、かれの器の大きさをはかりかねたのであった。

楚の威王は荘周を賢者だと聞き、使者をたて手厚い贈り物を与えて迎え、宰相にすると約束した。荘周は楚の使者に向い、笑いながら言った、「千金の利益は重く、卿・相は尊い位だが、おぬしは郊の祭に生贄にされる牛を見たことはないか。何年も飼育して、繡の着物をきせて、太廟へ引きこむ。その時になって、小さな豚になりたいと思っても、それができようか。おぬしはすみやかに去れ。わしをけがしてくれるな。わしはきたない溝の中でゆるゆると泳ぎまわるのが愉快なのだ。国をもつ者にしばられることなく、一生仕えず、わしの心のままにしているまでだ。」

申不害というのは、京（県）の人である。もとの鄭の国の小役人であったが、習った学問で韓の昭侯に仕えたいといい、昭侯は任用して宰相とした。国内では政教をひきしめ、国外では諸侯をあしらうこと十五年。申子が一生を終えるまで、国は治まり兵はつよく、韓に侵略してくる者はなかった。申子の学説は、黄・老に基づくが、刑名の論を主張した。著書二篇。「申子」と名づけられている。

韓非というのは、韓の国の公子である。刑名法術の学説をこのんだが、その帰着するところはやはり黄・老の説であった。韓非は生れつき吃りで口で述べるのはうまくなかったが、著書にすぐれていた。李斯と同じく荀卿に師事したが、李斯は韓非におとると自認していた。

韓非は韓の国がだんだん他国に削り取られ弱ってゆくのを見ていて、しばしば意見書を提出し韓王をいさめたが、王はとりあげなかった。そのとき韓非は〔王の〕統治のしかたが、法令制度を明確にし、勢いをもって臣下をおさえること、および国を富ませ兵を強くし、人材賢者を求

めて任用することを急務としないで、かえって、うわべばかりで実は国を蠹むものをひきあげて実際の功あるものの上におくことにつよく反対し、次のように考えた、「儒者は文によって法をみだし、俠者は武勇に

---

(1) 関は散関だといい、函谷関だともいう。どちらも今の陝西省に在る。散関のほうがいっそう西にあって、これより外は全く異民族の住む地域であった。老子が西方へ行って仏となり仏教の祖となったとの後世の伝説は、ここから附会されたのである。

(2) この四字は二様に解せられる。関の令（関所の長）姓は尹、名は喜とするのが一。あるいは関の令尹で名は喜（この場合、姓は未詳）ともよめるが、今は前説に従う。索隠は北魏の崔浩の説を引き、「尹喜は散関の令であった」という。漢代には「関尹子」九篇の書があった。かれ自身も学者であった。「荘子」天下篇には関尹・老聃を並称し、同じ学派に属するとみとめられる。実は関が姓、尹が名で環淵（孟子荀卿列伝に見える）と同一人物だと最近は考えられている。

(3) 太史儋の予言は「秦本紀」（未訳）にも見える。司馬遷はたぶん父司馬談の思想をうけついだのであろうが、この種の予言をこのんで記載する。

(4) 隠君子とは君子で隠者であった者の意。これ以下が、むしろ司馬遷の真意であるらしい。司馬遷は老子を実在の人物として考えようとした。しかし父司馬談は、「太史公自序」にも明言されるごとく百家のうちでも道家に優位を与えていた。そして司馬遷は道家の優位がくずれ、儒学が思想界の最上位を占めつつある時代に生きた。かれはその前代の思想を無視できなかったし、父の影響もあって、一見混乱した記述をしたが、実は老子の神秘的な外衣を除こうと欲したのであろう。しかし他の思想家たちの子孫については、述べていないのに、老子のみは家系が明記されるのは、やはりかれの思想を司馬遷が特に重要だとしたためであろう。

(5) 「論語」憲問篇の文。

(6) このあとに原文「李耳無為自化、清静自正」の二句があるが、この列伝の初めに訳出した「太史公自序」の文そのままで、後の人の竄入とする武内氏の説が正しいであろう。今この二句をけずり訳文には入れない。

(7) 蒙は県名。春秋時代では曹国に属していたが、宋の景公が曹を滅してより宋に属していた。今の河南省帰徳（商邱）県の近くである。

(8) 原文「寓言」。二つの解釈がある。寓は偶ともかく。偶は対と類義語だから、対話の義とするのがその一。寓はまた寄寓の義であるから、ある人物にことよせて自己の思想を語らしめたとするのがその二（ともに索隠にみえる）。いま両説を合せて解する。「荘子」中の対話の大部分はたしかに架空のもので、人物そのものが作り設けられた場合と、実在の人物に仮託した場合と両方ある。

(9) この話はだいたい「荘子」列御寇篇によったと想われる。また「きたない溝」（汚瀆）以下は秋水篇に似た一節がある。今の「荘子」のテクストは司馬遷が見た本とは少しく異なるようだから、今は亡んだ別の篇から引くかもしれない。

(10) 黄老は通常は黄帝および老子の書をさすと解されたが、異説がある。「太史公自序」の「六家要指」の一段では「道家」とよぶのが、この黄老の学説と全く同一の内容であるかどうかは決定しがたい。なお申子の書は今は亡んで全貌を知ることはできない。

(11) 刑名は形名というのと同じく、事物の名（観念・意見）とその形（現実・実行）が一致するか否かを追究し、観念にまどわされないで本質をみきわめる方法。認識論としては「名家」の論理学をみちびいたが、これを政治に応用したのは「法家」に属するひとびとで、「韓非子」の定法篇は申不害の説を紹介し批判を加えた。

(12) 法とは政府の明示するもので、それを守るか守らぬかによって人民に賞と罰をくだす。商鞅が実施した（四四ページ）。術は「臣下の負担能力に応じて官職を授け、臣下のあらかじめ立てた名目に沿って実績を要求すること。」申不害がこれをおこなった。権力が君主に集まる点は同じであるが、臣下の能力を重んずる点で商鞅と少しちがう。くわしくはこの全集19「諸子百家」四〇三ページを参照のこと。

(13) 荀卿については列伝第十四（九六ページ）参照。すなわち荀子。

(14) 勢の意味は前掲「諸子百家」四〇〇ページ参照。

(15) 文は礼文・文飾。礼の煩雑さをいう。見方をかえれば、それが文化的温和さでもある。次の俠者の武すなわち武勇・武術に対する。

よって、禁令を犯す。余裕があるときは名誉あるものを寵愛し、危急のおりには甲冑の士を用いる。現在ではふだん高禄で養ってあるものは、いざという時の役に立たず、役に立つものは、ふだんは養われているものでない」と。廉直の士が邪枉な臣から排撃されることを悲しみ、前代の君主の得失のちがいを見わたしていた。そこで孤憤・五蠹・内外儲・説林・説難などの諸篇を作り、十数万言であった。

しかし韓非は〔人君に〕進言することのいかに困難であるかを知りぬき「説難」篇を作り、その書にはあらゆる場合が言いつくされてある。そのはては秦で殺され、自分は〔熟知していたはずの危険から〕脱し得なかったのであった。説難篇にいう、「すべて〔人君に〕説くことがむつかしいのは、説く者の智慧において説きふせることの困難があるのではない。また説く者の弁舌が自身の意図を明白にすることに困難があるのでもない。説く者が思うぞんぶん述べきる勇気の問題では、なおさらない。すべて説くことのむつかしさは、説く相手〔たる人君〕の心を見ぬき、いかにして自身の説きかたをそれに適合させうるかにある。

かりに相手が高い名〔仁義のたぐい〕を欲しているとする。それに実利を厚くすることのみを説くのでは、節義なくして卑しい心の者だと見なされて、必ず遠ざけられてしまうであろう。相手が実利の厚さをのぞんでいるものだとする。それに高い名を得ることを説くならば、心にもないことを言って現実にはうとい者だとみなされ、必ず取り用いられないであろう。相手が心ひそかに実利を望み、しかもうわべは名を得たいものだとする。それに名だけについて説けば、うわべでは任用されても、実はうとんぜられるであろうし、もし実利について説けば、かげではその言を用いても、外観上、やはり〔説く者〕自身はすてられる。これらの困難を知らねばならない。

いったい事は密なるをもって成功し、語は泄すをもって失敗する。それは自分が他人にもらした場合に限らない。ひとがかくしていることにふれるだけでもよくない。そういう場合は危険である。貴人には何か過失のかたはしがあるものだ。それを明白に述べ、りっぱなことばで議論し、主君の悪行を推測させることになる場合は危険である。人君の沢がまだゆきわたっていないうちに、それを究局まで前知して語るならば、その意見が行なわれ効果はえられても、言い出した本人のことは忘れられるであろう。その反対に自分の意見がまだ行なわれぬうちに失敗があれば、疑われるであろう。この場合は危険である。

いったい貴人は計画がうまく運んだときには、自分の功だと思いたがるものなのだ。その意見を述べた者が、ちゃんと予見していたとなると、危険である。また貴人は明らかにしくじるときでも、自分はほかの原因があったと思うものなのだ。意見を述べた者が予見していたとなると、危険である。〔人君が〕どうしてもやろうとしないことを強い、どうしてもやらずにおれぬことを制止する場合は、危険がある。

ゆえに次のことが言える。人君に大人（明君賢主）のことを語れば、〔意見するものが〕己の長所を売りつける奴だと思われる。人君の寵愛のものについて語れば、それを手づるに取り入るこんたんだと思われ、憎むものについて語れば、〔人君〕自身をこころみるのだろうと思われる。率直にことば少なくすれば、知識がとぼしい奴だとばかにされ、故事をならべ、もりだくさんにすると、尊敬はされても口数が多すぎると思われるだろう。〔人君の〕心にかなうようにあらましだけの意見をのべれば、臆病で言いつくせないのだということになり、雄大な構想をたてれば、いやしいくせに傲慢無礼だということになるだろう。これらの説きかたの困難を、知らねばならない。

すべて意見を述べるにあたり大切な事は、説く相手（人君）のほこりとする点を誇張して、恥とする点を全然述べないようにする言いかたを心得ることにある。相手（人君）が失策だったと気づいていることは、その過失を極言してはいけない。決断力が強いと自信のある相手には、その対抗者となって怒らせてはいけない。自らの力を過信する者に対し、事の困難を指摘し水をあびせてはいけない。まったく別の企てでも結果が同じになるように規い、全然違った目的の人でも実行が同じであるの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com